日本マンガのドイツ語翻訳のテクスト比較研究

あずまきよひこ『よつばと！』を題材に

大塚 萌（千葉大学大学院人文社会科学研究科）

キーワード：翻訳、ドイツ語、テクスト比較、よつばと！

問題と目的

近年日本のサブカルチャーに対する注目が高まる中で、マンガも日本国内の刊行に合わせて、かなりのペースで様々な言語に翻訳されている。しかし、その大きな需要と消費によって生まれる翻訳されたマンガのテクストについて着目し、考察や分析を行った研究はその翻訳・発売ペースに追い付いていない。この現状を受け、翻訳されたマンガのテクスト分析を試みるのが本研究の目的である。

本研究では、ドイツ語における日本マンガ『よつばと！』の翻訳テクストを対象とする。ドイツでの日本マンガの需要と消費の現状は、『よつばと！』で見ると、ドイツで刊行され始めた時点では 3 か月ごとドイツ語翻訳版が出版され、日本での発行ペースに追い付いた現在では、最新刊の 12 巻は日本語版と 7 か月差で発売されている。そのほかのマンガの発行ペースを見ても、日本の新刊が出てから 1 年ほどでドイツ語版が出版されている。また月ごとのマンガの新刊冊数は、2013 年 3 月にドイツ国内でマンガ出版大手の TOKYOPOP 社から 19 冊、Egmont 社から 25 冊となっている。

方法

本研究の対象がマンガのテクストであり、文字テクストとイラストが不可分であることから、文字テクストを中心に、原文に忠実であることを理想とする従来の翻訳・通訳を対象とする研究方法論は不十分であると考える。マンガの翻訳では、日本語のテクスト A にイラストを含めた文脈解釈を行い、この文脈をドイツ語翻訳に生かすために必要であれば、元のテクストと全く異なるテクスト B に翻訳するという創造的な翻訳が行われている。研究方法もこれに対応し、文脈翻訳を総合的に分析する方法を（仮にトランスラトロギーと呼ぶ）を採ることにする。

よって本研究では、日本語版のテクストから内容が削除・大きく変更され翻訳されたドイツ語版のテクストをもとの日本語版と比較し、どのように日本語版の文脈がドイツ語訳に反映されているかを考察する。この文脈的比較研究によって、日本語版のマンガにおける特徴的な表現が、別言語・別文化においてどのように受容され、理解されているかを考えるための重要な材料になると考える。

そのような比較を行うための分析対象として、本研究ではあずまきよひこの『よつばと！』を対象とする。5 歳児の少女〈よつば〉が、父親〈とーちゃん〉や隣家の〈綾瀬家〉の人々などとともに、日常の中で次々と出会う“初めての発見や感動”をコメディータッチで描くこの作品の持つテーマと、次の 3 つの特徴が本研究の分析に最適であると思われるからである。

この作品のテーマは、話の中心に〈よつば〉という 5 歳の幼児を据え、その視点から描くことによるディスコミュニケーションからのコミュニケーションの破壊と再編である。それを支える特徴として、1 つ目に、コメディーという描き方であることによる笑いの感覚をくすぐる数多くのテクスト、それに含まれる言葉遊びや表現を翻訳する際に生じる問題や工夫などを分析する。2 つ目は、幼児である〈よつば〉の「子供らしさ」というキャラクター性をテクストから考察する。言い間違いなどがこれにあたる。最後に、マンガを通してほとんどのテクストが会話の形で書かれることから、日本語らしさとドイツ語らしさの比較を行い、また多くの日常的なシーンからコミュニケーションの描かれ方を分析する。

結果と考察

日本語版・ドイツ語版『よつばと！』のテクストを比較し、中でも内容が削除されたもの、内容が大きく変更されたもののテクストをいくつかの特徴ごとにまとめてその翻訳の工夫や問題について論

じた。大きく 2 つに分け、1 つ目は言葉遊びや言葉の間違いなどの日本語らしい要素や、日本の童謡のテクストなど直訳ではドイツ語に内容を反映することが難しい要素がどのように翻訳されているかという例、2 つ目は皮肉や婉曲の要素を含むなど、またはイラストや文化的な要素を含み、文脈解釈によって翻訳され、場合によってはドイツ語版のテクストが日本語版から大きく変更された例という 2 つの観点から分類・考察した。

それぞれの項目で、ドイツ語に翻訳するときに具体的な内容を（説明的に）付加するなどの工夫、ドイツ語による言葉遊びの代用や挿入などドイツ語としての工夫がみられる他に、日本語らしさの特徴と思われがちな婉曲的な言い方がドイツ語のテクストにも表れるなどの言語学的なステレオタイプ的通念を否定する例など、様々な興味深い発見があった。中でも『よつばと！』のドイツ語翻訳の問題性が表れると思われるのは誤読が生じている翻訳例である。誤読とは、単なる誤訳とは異なり過剰な文脈解釈、日本文化への不十分な理解、テクストの表記による問題などを理由におこるものである。

上図の例をみると、日本語版で「じーだけのははずれ　でもうらがしろいのはすこしあたり」というテクストが、ドイツ語版では”Eigentlich sind die mit Pilzen doof, aber wenn sie auf der Rückseite weiß sind, sind sie in in Ordnung.”（キノコのやつは退屈だけど、裏面が白かったらそれは大丈夫）となっている。チラシを集めるのが好きな〈よつば〉が、カラフルなピザのチラシは「あたり」だが、漢字が読めないために絵の入っていないチラシは「はずれ」、しかし裏面が白いものはメモ用紙として使えるので「すこしあたり」と説明しているはずのテクストに、ドイツ語版では”Pilzen”（きのこ）という単語が紛れ込んでいる。これは、子供らしさの表現としての「ひらがなだけ・長音の多いテクスト」の「じーだけ（字だけ）」を「しいたけ」と解釈したため生じた誤読であると考えられる。

結論

本研究で対象とした『よつばと！』の日本語版・ドイツ語版の翻訳テクストの文脈翻訳的比較から、日本語版のテクストの内容を忠実にドイツ語に移し替えるような直訳的翻訳という範疇を超えた、ドイツ語版の読者に日本のマンガを違和感なく楽しんで読ませたいという意志の見て取れる、日本語版のテクストを解釈し、ドイツ語らしさに反映させるという翻訳が多くあった。これは、翻訳するドイツ語にとって翻訳は受動的なものではなく、創造的・主体的な受信として行われていることを示している。それは、翻訳者が悩みぬいた結果誤読の例となってしまった翻訳テクスト例からも明らかである。

こうした創造的な営みが見て取れるマンガ翻訳は、文字テクストを中心とした翻訳・通訳を対象とする従来の翻訳論からだけでは十分に分析・考察のできないものであり、方法論的な進化を促すものであると思われる。問題提起に具体的に述べたように、こうしたマンガ翻訳テクストは各言語で日夜増え続けており、この適切な研究は翻訳しにくい日本文化をいかに海外に紹介していくか、重要な示唆を与えてくれるものと思う。

（OTSUKA Moe）